超高齢社会に向けた分野横断研究会
NEWS LETTER Vol. 9
発行：2021 年 12 月 発行者：横浜市立大学 都市社会文化研究科 陳 礼美研究室　中井 紬

健康都市・空間デザインの疫学研究と社会実装
花里 真道先生
（千葉大学 予防医学センター／デザイン・リサーチ・インスティチュート）

11 月 25 日 Zoom にて、第 9 回目の研究会が開催されました。今回は花里先生に、空間や環境が人の健康に与える影響について、国内外の研究や実践をお話しいただきました。

海外では、日本に比べ、環境と健康に関する研究の蓄積がなされているそうで、例えばニューヨーク市では、健康の空間計画のガイドラインである"ACTIVE DESIGN GUIDELINES"が発行されたり、社会経済状態があまり良くない方々が住む地域で野菜や果物を売る店や事業者に対し、不動産税や工事費にかかる消費税を助成して、住民の野菜や果物へのアクセシビリティを高める「フレッシュプログラム」という事業が行われたりしているそうです。日本の事例については、JAGES（Japan Gerontological Evaluation Study, 日本老年学的評価研究）の調査をもとに行われた 3 つの研究についてお話しいただきました。①交流・つながりに関する研究は、高齢者の子どもとの関わりに着目し、最寄りの小学校 400m 未満に住んでいる女性の高齢者を基準に、遠くなるにつれ、うつの傾向が高いという結果が出たそうです。男性の高齢者にはそのような傾向は見られなかったとのことでした。②ウォーカビリティに関する研究は、歩道が多い地域に住むほど、3 年後の認知症発症リスクが 27%低いという結果となったそうです。歩道の量が多いことで、外出行動やコミュニケーションが起き得ると考察されたとのことでした。③感性に関する研究は、緑地の多い地域に住む高齢者は、うつになるリスクが低いという結果が出たそうで、これは海外の先行研究とも一致するそうです。これらに加え、先生が関わっておられる実践として、千葉県柏市の柏の葉地域でのガイドライン作成や、歩きたくなるような歩道の仕掛けづくりとして、アートサインを設置したお話など、取り組みを多数ご紹介いただきました。

質疑応答では、高齢者の健康のために、バリアが完全になくなった方が良いのか、坂など少し抵抗がある環境の方が鍛えられるのかという議論で盛り上がりました。

++*+